

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



チェルノブイリ子ども達へ クリスマスカードを送ってみませんか？

こんにちは。研修生のコバタケです。

最近寒くなってきましたね。体調など崩されていないでしょうか？ さて、今年もクリスマスの季節が近づいてきました。「チェルノブイリ救援・中部」では、チェルノブイリ事故により、被災地で苦しんでいる子ども達の不安を少しでも和らげ、ともにクリスマスの喜びを祝うために、現地にクリスマスカードを贈るクリスマスカードキャンペーンを行っています。毎年、数多くの方のご協力のおかげで大盛況となっております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして今年も、クリスマスカードキャンペーンが始まりました。先号のポレーシェにも、クリスマスカード及びミルクキャンペーンのチラシを同封させていただきましたが、改めてクリスマスカードキャンペーンの説明をさせていただきます。

事故から23年経った今でも、チェルノブイリ子ども達は、食べ物による内部被曝、土壌の汚染による目に見えない放射能に恐怖し、苦しんでいます。そしてチェルノブイリ原発事故から長い年月が経ち、事故が風化し忘れられることを危惧しています。また、社会から見放されているのではないかと、多くの子ども達が不安な日々を過ごしています。

そんな子ども達へ、クリスマスカードを贈ってみませんか？ あなたの温かいカードが、チェルノブイリ子ども達の励みになり、希望を与えます。クリスマスは、日本の子ども達にとっても、チェルノブイリ子ども達にとっても一大イベントです。そんな素敵な時間をともに喜び分かち合いませんか？ 皆様お忙しいとは思いますが、なにとぞご協力をお願いいたします。カードの作り方・送付方法・締切日は、次のページを参照してください。またクリスマスカード及びミルクキャンペーンのチラシが必要な方は、事務局・担当の小島裕司（こばたけゆうじ）まで、一声かけてください。すぐにお送りします。

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



〈ウクライナフェア 2009 in もちのき広場にて (10. 24)〉

☆クリスマスカードキャンペーン詳細☆

カードは、現地のウクライナ語はもちろん、日本語・ロシア語・英語なんでもかまいません。

手作りまたは市販のカードに、あなたの温かいメッセージをそえて、チェルノブイリの子ども達に届け、クリスマスの喜びをともに祝いましょう。

私達スタッフが、折鶴とメッセージを同封して、病院や孤児院にいる子ども達にクリスマスカードをお届けします。

(※ 折鶴などの折り紙作品も募集しています。)

カードの締め切りは、**12月14日(月) 必着**です。

宛先：〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 楽園アパート 1-10
チェルノブイリ救援・中部 事務局

それから、カード発送作業をお手伝いして下さるボランティアを募集しています。

12月14日(月)と12月16日(水)に、事務所でカードの発送作業を行います。そのお手伝いをしてください。

お忙しいとは思いますが、是非よろしくお願ひします。もしお手伝いして下さるといふ方は、事務局の小畠(こばたけ)までお電話ください。

☆ミルクキャンペーンのお知らせ☆

チェルノブイリ事故当時の子どもが母親になり、汚染地域に住み続ける母親は、放射能汚染していると知りながらも、我が子の空腹を満たすために母乳を与えます。母から子へと被曝の連鎖が続くのです。

チェルノブイリ救援・中部では、そんな連鎖を断ち切るために、汚染されていない安全な粉ミルクを贈る寄付金を募っています。

みなさまからの寄付金は、ウクライナの“ホステージ基金”を

送金は郵便振替でお願いします。

00880-7-108610

加入者名：チェルノブイリ救援・中部
一口いくらからでも構いません。
「ミルク代」とお書き添えください。



通して、「ジトーミル市立小児病院」や「孤児院」の子ども達へ、きれいな粉ミルクとなって贈られます。

被曝の連鎖を断ち切り、チェルノブイリの赤ちゃんが元気に育つように、皆様のご協力をお願いします。

前号・前々号と、この間数回に渡り、皆様に「賛助会員」「一坪キャンペーン」への加入・カンパのお願いを行ってきました。10月末の収入残高は、約490万円で、3月迄の支出額が約700万円予想され、厳しい財政状態が続いています。来年度へ持ち越す金額の目途は立ちません。しかし、来年度も既存事業（被災者団体への医薬品援助・病院への援助・ミルク援助）、特別事業（菜の花プロジェクト）、国内事業（ポレーシェ隔月発行・講演会・クリスマスキャンペーン・事務所維持）で、最低でも約1,400万円は捻出しなければなりません。再度、読者の皆様に支援のお願いをするともに、前号（113号）でのお願い事項の追加報告をさせていただきます。

①「賛助会員」を募集します。（「ポレーシェ」を年間購読料3,000円の有料とする。）

- ・8月以降3,000円以上のカンパを多く頂きましたが、振込表賛助会員の項に☑が無い人が多く、また、事務局に「毎月小額だけれど年間では3,000円以上になってるが、それではだめか？」とのお問合せ等もあり検討の結果、名簿管理を変更し、このような方々にも対応できるようシステム変更に着手しました。
- ・現在加入申込は、購読者総数の10%弱です。今号を機に、より多くの方の「賛助会員」へのご加入をお願いします。

②「菜の花プロジェクト・一坪キャンペーン」を募集します。

- ・目標口数（1,000口）に対してまだ10%弱の段階です。一層のご協力をお願いします。

③「スタディ・ツアー」を計画します。

- ・2011年4月に、原発事故25周年追悼集会等への参加を含めて企画します。

④「官民の助成金申請」を積極的に行います。

- ・10月末迄に3団体への申請を行い、今後も順次申請準備中です。

⑤「ホームページ」を全面リニューアルします。

- ・現在進行中のホームページ全面リニューアルを契機に、資金援助の広範化を図ります。
- ・各家庭で眠っているお宝をご提供いただき、ネットオークションで資金獲得を図ります。別途、担当原さんからのお願い記事（p7）を参照してください。

来年（2010年4月）、発足20周年を迎える「チェルノブイリ救援・中部」は、皆様の更なるご支援に応じて、ナロジチの復興と被災者の健康を目指し、活動を継続していく覚悟です。

「賛助会員」「一坪キャンペーン」へのご加入を、重ねてお願いします。

イベントの秋…楽しく、なごやかに交流…

あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ ～世界を体験する国際理解イベント～



10月10日と11日、愛・地球博記念公園で、「あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ」が開催され、チェル救も参加しました。このイベントは、主催が愛知県、後援が外務省、連携協力が「生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会」というものでした。県民の国際理解を促進するため、フレンドシップ相手国（愛知万博における一市町村一國フレンドシップ事業時の相手国）の生活・文化等、体験を交えて紹介する「フレンドシップコーナー」と、生物多様性の面からその国を紹介する「生物多様性コーナー」を一体的に設置して、

来場者が楽しみながら国際理解を深める企画との内容でした。

実際に私達が行ったのは、設置されたブースで、ウクライナ料理「ボルシチ」の提供と、「チェルノブイリ・カードキャンペーン」「菜の花プロジェクト紹介コーナー」、そして、このフェスタの企画に予め設定されていた「民俗衣装パレード」への参加でした。ブースではエプロン姿もほほえましい事務局の河田さんとパートナー、同じく運営委員の神野美知江さんやボランティアの女性、そして、後から事務局の山本さんも加わり、かいかいしく手際よく準備し、とびきりおいしいボルシチの出来上がり。販売したところ、なんと2日とも昼前に完売してしまいました。一方、カードコーナーでは、研修生の小畠さんや去年のインターン黒瀬さん、池田さんや呼び込み専門の山盛も加わり、親子連れにアプローチ。

来場者の方が、親子・兄弟姉妹で「世界にただひとつ」の手作りカード作りに参加してくださいました。また、菜の花プロジェクトの紹介は、説明上手のポーシェ編集長・神野英樹さんが担当。「チェル救フレッシュはりきりトリオ」が、民俗衣装パレードに参加しました（上の写真）。

両日とも晴天に恵まれたお祭り日和で、両日合わせ2万6千人もの来場者があったとのこと。チェル救イベント月間のスタートを切った2日間でした。（山盛）

岐阜県の県民文化ホール未来会館にて ～展示会&ワークショップ～

10月1日から1ヶ月間、岐阜市にある”県民文化ホール未来会館”で、国際交流・国際協力というものを身近に感じてもらうために、展示会やワークショップを開催する、“岐阜に生きる地球市民育成事業～見て、聞いて、感じて学ぶ～”に参加しました。愛知県外でパネル展示を行うのは久しぶりで、この展示会を通して、多くの人にチェルノブイリの事故のことや現状を知ってもらえたのではないかと思います。

県外のパネル展示ということで、準備段階から張り切り、何人ものスタッフが事務所に集まり、パネルを夜遅くまで作成しました。展示会場のテーマが『チェルノブイリの過去・現在』なので、約18枚のパネルと40枚の写真を4畳半ほどの展示室に、『事故当時の様子』『菜の花プロジェクト』『チェルノブイリの今』などに分かれたものを、所狭しと展示することができました。展示室の電気がスポットライトで、ウクライナで撮った写真がとてもよく映えて、一枚一枚に写真の説明を付けたので、誰が見てもわかりやすいものになりました。

10月18日には、未来会館のロビーで、クリスマスカードを作成してもらうワークショップを行いました。当日は、会場内で大きな会議があり、子ども達はあまりこないと言われていましたが、来場者に約40枚ほどのカード書いてもらうことができました。折り紙をキャラクターに折ったものや、桜や星の形に切った色紙をカードに貼っていく人など、たくさんのアイデアが出て、楽しいワークショップとなりました。（山本）



ワールド・コラボ・フェスタ2009 in 久屋大通公園&オアシス21

～世界とつながる 私たちの暮らし～

10月24日・25日に、名古屋市栄で開催された毎年恒例のビッグイベント“ワールド・コラボ・フェスタ 2009”で、パネル展示とクリスマスカードのワークショップを行いました。開催中は曇り雨で、雨の心配がありましたが、参加者の熱意が大きかったのかイベント終了まで雨が降ることもなく、多くの来場者にクリスマスカードを作成してもらうことができました。

今年は、初日にチェルノブイリの子供達にクリスマスカードを送ることを知り、興味を持ってくれた参加者が2日目に自宅でカードを作成して、持ってきてくださる方もいらっしゃいました。クリスマスカード・キャンペーンを行うたびに、毎年多くの方々に参加・協力してもらい、サポーターになってくれる人たちがいる事に、「チェルノブイリの事故は、日本のみなさんの中でもまだ風化していないのだということ、現地の子供達に早く知らせたい！」と思う事ができました。
(山本)

皆様のそれぞれの個性が発揮されたクリスマスカードは、きっとウクライナの子供達に勇気を与えてくれることでしょう。今回のワールド・コラボ・フェスタで特に感動したのは、去年ブースに何度も遊びに来てくれた男の子が今年も遊びに来て、何枚もカードを書いてくれたことです。去年より少し大きくなったように感じる背中が黙々とカードを書いている姿に、このキャンペーンが担う役割を見たように感じました。当日ご来場くださった皆様、本当にありがとうございました。そして、来年もお待ちしております。
(黒瀬)



聖マタイ教会でバザー 大繁盛!!

11月8日(日)、名古屋の「聖マタイ教会」でバザーが行われ、チェルノブイリ救援・中部も参加しました。(聖マタイ教会は、2007年11月、後藤佳乃さんによる「チェルノブイリ救援・チャリティー・コンサート」が開かれたところでもあります。)当日は、天気も良く暖かい一日でした。朝8時半集合、10時までの間に商品を並べて準備完了。キリスト教関係の団体が中心でしたが、20ほどの関係団体が参加しました。チェル救は、入り口すぐの良い場所。今回は、事務所に眠っている沢山の日用品や、未使用のノート・布バッグなどの会員からの提供品や、ウクライナのみやげ物など…。普段は中々売れないものを思い切って格安販売することにし、ダンボール箱に「この中何でも10円、この中は100円」などと貼り紙をしました。当日は、毎月のチェル救運営委員会のあとの懇親会場「浜ちゃん」でよくお会いする新里さんも応援に駆けつけてくださり、大活躍でした。チェル救の当日参加者は、搬入搬出スタッフも入れて5名。準備が終って、10時～11時は礼拝堂に移り、教会関係者に混ざって礼拝を初体験。まごまごする我々を、周りの信者さんが親切にガイドしてくれ、聖歌を歌ったり、得がたい体験をしました。11時、いよいよバザー開始。ドアの外では近所の人々が行列を作るほどの人気。ドアが開くと、お客がお目当ての店舗に殺到。永年売れ残りのウクライナ製の木製花瓶(?)や、珈琲セット、テーブルクロスなど大物には個別に値段を付けました。3時の終了時には持ち込んだ雑貨の6～7割は売れて実益8,360円。商品は、ビニール袋に入れ事前にクリスマス・カードキャンペーンのチラシと、葉の花プロジェクトのチラシを入れておいたので、バザー後の反応を期待しています。

財政難のおり、「家庭の不要品を提供していただき、こうしたバザーでこつこつと稼ぎ、その機会を利用してキャンペーンをするのも悪くないな」と思った一日でした。
(河)

帰国後のラスキ事情 【ラスキ村通信 続報】

(原 富男)

計画通りにことが進めば、私の滞在期間内（9月12日～9月18日）に全ての装置が使えるようになるはずでしたが、帰国間際に色々な問題が出てきました。

1. 原料取り違い問題

原料は、当面新鮮な牛糞を投入することになっていたが、実際には牛糞で作られた「堆肥」が使われていたことが判明した。いくらウクライナ語で牛糞と堆肥が同じ言葉とはいえ、あんまりだ。このまま堆肥の原料を投入すれば「大問題」。急遽、原料の投入をやめてもらい、対応を検討した。一番良い方法は、投入済みの原料を全て取り出すことなのだが、それをやる事自体が大変な作業であり、大量の水を投入して堆肥を押し出すことにした。しかし、期待に反し堆肥は出てこない…。

現地の担当者に日本からメールで指示し、対応してもらう。到底バケツで汲み出せる量ではない。現地担当者は奔走し、ラスキ小学校に下水用ポンプのあることがわかり、このポンプを借りての汲み出し作業となった。

* 結局、このポンプが威力を発揮し、無事汲み出しに成功した。（右の写真）



2. メタン菌（種菌）問題

汲み出しに成功したことは良いのだが、何のことはない。振り出しに戻ったということであり、初期作業を、もう一度やりなおさなければならない。ここでまた問題発生！ 初期作業には、メタン菌（種菌）の入った水200リットルを入れなければならないのだが、「最初の段階で、種菌は入れられていたのか？」という疑問が出てきて、現地にメールで問い合わせたところ、種菌は入れられていなかったことが判った。この原因は単純な連絡ミスだが、言葉が通じないことと、習慣や常識の違いなどで、幾度も苦い思いを味わわされている。がっくり…だ。けれど、ここで悄然としているわけにはいかない。種菌を調達しなければならない。現地に、学校の下水・沼・川・どぶなどでぶくぶく泡の出ているところはないか探してもらう。現地はもうすでに秋であり、気温が低下して、探し回っても泡の出ているところはない。諦めかけた「その時」、農業企業体の牛が水浴びする溜め池で泡を発見、無事、種菌は投入することができた。

3. 脱硫装置

時間が足りず、残してきた作業が色々出てしまった。その一つが「脱硫装置」である。バイオガス中に含まれる有害な硫化水素を取り除く装置だが、構造は簡単。20cm程の塩ビパイプの筒の中に、「さびた鉄・炭・おがくず」を入れた物だが、現地ではその材料作りも、一からやらねばならない。企業体の牧草地の中を歩き回り、さびた鉄を手に入れ、それを切断し細かくする。一々手作業だ。また炭の入手も大変だ。滞在中、炭は自分達で作るつもりで焼きはじめたのだが、途中で大雨が降り火が消えてしまい、買う事になった。しかし、日本の様に直ぐ炭が手に入るわけではなく、担当者に走ってもらい、無事買うことができた。

4. 圧力計

これも残してきた作業だが、鋼管にビニールパイプつきの圧力計を接合し、圧力計を貨車の外部壁面に取り付け、内部に不凍液をいれてもらった。自分でやれば簡単なことだが、現地担当者はなれない作業に大変苦労したとのこと。



<貨車内の脱硫装置>

5. 加温装置

冬場に、気温の低下によるガス発生量の低下を防ぐ為、醗酵槽の内部には、加温用のパイプが設置されている。パイプ中の不凍液は加温装置で暖められ、これが循環することで醗酵槽の温度低下を防ぐのだが、帰国間際、不凍液を循環させるポンプが作動せず往生した。現地のディードフ氏や学生が手を加え、無事循環できるようになった。

6. 醗酵槽内の温度低下

これまで書いてきたことが秋口に始まり、もう冬に入った現地では、「醗酵槽内の温度低下」が直面する課題となっている。本来なら、発生したガスを燃やし、その火力で加温装置を暖め、醗酵槽の加温をする予定であったが、色々なトラブルでガスの発生量が少なく、現在、自前のガスでの加温ができない状態にある。現在の状態は、「醗酵槽の温度が低い為、ガス発生量が少なく、加温する為のガスコンロによる加温装置を稼働できない」という状態である。この状態を突破すべく、現地では今、電気コンロでの加温を行っているが、熱量が少ないため必要な加温が未だできていない状態にある。そこで今後は、装置全体の熱損失を防ぐ方策をとり、一時的に今よりパワーの大きな方法で醗酵槽を暖める予定である。

* 色々問題が出て大変ですが、この冬場を実験の好機と考え、更に頑張りたいと思います。

尚、前号記事の写真説明で「ねじ切り機」と説明された装置は、「金属切断機」の誤りです。訂正しお詫びします。

資金作りの「お宝ネット」はじめました！

菜の花プロジェクトも来年は正念場。BDF・バイオガスとも、実際の運用の取り組みに入ることとなります。そのためには資金が必要になるわけですが、昨今の経済状態ではなかなか資金も集まりづらい状況です。そこで、もう少し負担の少ない資金集めを試みることにしました。それは、中古品の物品販売です。必要のなくなった生活用品を救援・中部に寄付していただき、それをバザーやネットオークションで売り捌き、資金化したいと思います。

*販売する物品は、不要になった生活用品、何でも構いませんが、極端に汚れた物、完璧に壊れているものはご遠慮ください（但し中には修理できるものもありますので電話ください）。

：生活用品・家電製品・衣類・カメラ・CD・レコード盤・オーディオ製品・古道具・工具・農具・古民具・骨董・本・玩具・模型など基本的に何でも構いません。ただし発送前に電話ください。

*発送

1. 発送先は右の通りです。
大量の物品・大型物品などで発送が困難な物の場合は電話ください。
場合によりトラックなどで集荷します。
2. 送料は基本的に元払い（発送者負担）でお願いします。宅配便サイズを超えるサイズの物品は、各運送会社の普通便が格安ですので、利用をお勧めします。

【発送先】

〒399-4511
長野県 上伊那郡 南箕輪村 南原9955-2
原方「救援・中部 お宝ネット」宛

電話 0265-73-9355
ファクシミリ 0265-73-9352

*販売方法など

販売は、バザーやネットオークションなどで行い、経費を除いた金額がチェルノブイリ救援・中部の活動資金として寄付されます。売り上げ金額は、ボレーシェ誌上に報告されます。

*試し販売の結果

この提案にあたりネットオークションで試し販売をした一例ですが SL 模型 2 台を寄付していただき（1 台電気系統不良、1 台塗装剥かれ）販売したところ、合計 52,800 円で買い上げていただきました。すべて順調とはいかないかもしれませんが、着実に販売したいと思います。ご協力をお願いします。

———— システムの整合性と放射能対策 ————

2010年は、ナロジチにおけるこれまでの事業の完成に向けた第一歩となる。即ち、過去3年間のナタネ栽培の結果をまとめ、放射能除去に最も効果的な栽培条件を確定する。また、試運転に成功したバイオディーゼル油生産を軌道にのせ、自力で菜種栽培畑のエネルギーを確保する。さらに、現在ようやく稼働し始めたバイオガス装置の本格運転によって、発生するバイオガスの量と、それに必要なバイオマスの量との関係を明らかにする。こうして各ハードウェア部分の完成に力を注いだこれまでの事業を、それぞれ本格稼働に導き、システム全体の流れを作り出す。加えて、最後に残った最も重要な課題の放射能対策に着手する。

● ナタネ栽培のまとめ

2007年4月に初めてナロジチで菜種栽培を始めてから2年半が経過した。この間、ジトーミル農業生態学大学の努力で様々な結果が明らかになった。例えば、放射能のセシウム137($Cs137$)はナタネの種子に最も多く蓄積するが、ストロンチウム90($Sr90$)は葉や莖に蓄積する。しかし、ナタネ油にはこれらの放射能は混入せず、全ては油粕に残る、などである。また、ナタネの収量は、秋蒔き菜種種子が約3 t/haであるのに対し、春蒔きナタネ種子はその半分の1.5 t/haしか取れない。だが収量に反し放射性物質の吸収率は、春蒔きナタネの方が秋蒔き菜種より成績がよい、等等である。しかし、最初の2年間は春のナタネ生育期に雨量が例年の半分しかなく、これはナタネの成長ばかりでなく、放射能の吸収にも影響を与えた可能性がある。現在、2008年の秋蒔き菜種と、2009年の春蒔き菜種のデータを分析中だが、これらを総合して、土壤中放射能の低減に最も効果的な栽培方法を確定しなければならない。3年間の栽培結果をまとめて、今後のために何らかの方針を打ち出す。

● BDFによるエネルギー自給へ

ナタネ油からバイオディーゼル燃料(BDF)を製造する試運転は、昨年9月に成功したが、購入した搾油機の不調等で、BDF装置の本格運転はできなかった。どうやら問題解決の目途はたったので、来年度は本格的な定常運転に向けた努力を始める。収穫したナタネで自前のナタネ栽培が可能

かなど、菜種栽培とBDFの連携プレーが始まる。自前で使用するよりも余分に生産できれば、何らかの公共的な利用の役にも立てたい。BDF装置の生産能力には十分余裕があるので、将来は住民がナタネ種子を持参すれば、BDFへの加工を実費で提供する、などの可能性を探る必要もある。日本もそうだが、ウクライナでもBDF利用のための制度的環境が整っていないため、実用化に至るまでには、まだまだ様々な困難も予想されるが、大きな流れに狂いはない。

● バイオガスの生産

バイオガス装置製造は今年5月に始まり、関係者の苦勞が実ってようやく原料投入の段階に入った。初期運転のために、まずは牛糞を投入しているが、運の悪いことに冬に向かって気温が低下し始めており、発生するバイオガスの量はまだまだ少ない。バイオガスは、メタン発酵菌というバクテリアの働きで生ずる。従って、発酵槽の温度が低ければ活性は落ちるのである。現在、発酵槽を加温する等の対策を始めた。こちら春に向けて、本格運転の準備を行う。バイオガスが正常に出始めれば、ナタネのバイオマスを投入し、出てくるガスの量とバイオマスの関係を研究する。また、バイオガス装置の廃水に含まれる放射能の測定なども、農業生態学大学の学生によって行われる予定である。

● 廃水の放射能処理

最後に残った放射能の処理については、前号でも触れたが、来年度の主要な課題である。実験から実装置設置までを目指す予定である。(河田)

「チェルノブイリ被災者・ゼムリャキ(同郷人)」「ウクライナ・キエフ市)での研修

09年10-11月編 【外務省長期研修プログラム】(戸村 京子)

【冬支度など】

10月は本来寒くなってくるのですが、温暖化でかつての様な寒さではないようです。30℃以上の真夏の日本から、綿のジャケットを汗だくで着てきたのですが、これではもちろん本格的な寒さ「モロズ(マイナス10~20℃の寒波)」には対処できないので、コートやブーツ(中に毛の張られたもの)、セーターなどを買い求め、冬支度をしました。

自宅でのインターネット接続の調子が悪く、時間がかかったり、途中で切れてしまったり、「ページが開けない」という表示などに、毎日悩まされました。まだ本格的とはいえませんが、何とかメール送受信ができるようになりました。

【新型インフルエンザの流行】

出発前から日本では、新型インフルエンザの流行について大きな話題となっていました。当地に来てからその声を聞かず、どうなっているのやろと思っていました。それが10月下旬になって急に、テレビで連日伝えられるようになり、ウクライナの西部から流行が広がりだしたということでした。流行に対する国の備えはなく、タミフルを緊急輸入したり、にんにく・たまねぎ・レモンを多く取るように勧めたり、ガーゼを4つ折にしたマスクの作り方を繰り返し放映していました。「マスクをする習慣のない国なので、薬局にも置いていない」と、ゼムリャキスタッフも心配そうでした。流行先進国日本から手土産に持ってきたマスクの箱は、来訪者に配られ、すぐになくなりました。

11月1日から、ウクライナ全土の学校や教育施設などが、3週間の『強制閉鎖』に入りました。冬期の楽しみであるオペラ・バレエ劇場やコンサートホールなども、閉鎖されてしまいました。私がいつもお世話になっているゼムリャキスタッフに、誕生日プレゼントとして購入したチケットも、残念ながら払い戻しを受けました。いつ再開されるのやら？

【ドイツからの支援者】

そんな中、ドイツから10年間被災者児童を支援している男性がやってきました。70歳のゲルハルトさんとドイツのテレビ局も一緒に取材にやってきました。今年は賑やかにはやれないので、限られた子どもを集めた会が催され、詩をそらんじたり、歌ったり、ダンスを踊ったりして、プレゼントをもらっていました。一足早いサンタさんの来訪のようでした。団体の内側から見ると、外国からのお客を迎える側も大変だなと自戒しました。



◀「秋の祝日」で寸劇を演じるゼムリャキの会員

ゼムリャキ会員のイベントも、10月30日の「秋の祝日」を催した後は、中止や延期となり、マッサージやトレーニング器を使いに来る人と、寄付金による医薬品配分の受け取りに来る人びとのみとなり、ひっそりとなりました。

【ラスキ村のBG装置の視察】

チェル救と現地などの協力で進められているバイオガス発生装置の始動が、まだ順調とはいかず、11月21日に様子を見に行ってきました。発酵槽の温度がまだ充分上がらず、ガスの発生がまだ少ないのです。現場では「あれこれ工夫してやっているのだけど…」と困惑していましたが、日本から原さん、ジトミルのディードゥフさんと竹内さんが連絡取り合いながら対処しているところです。

竹内さんのウクライナ便り

10月23日から11月25日まで、山口県宇部市の市民団体「えんどうまめ」の招聘で、キエフの少女合唱団（9歳から17歳までの子ども10名と指揮者・ピアノ伴奏者）が主に西日本に滞在、チェルノブイリ被災者支援のためのチャリティ・コンサート・ツアーを行い、私はその通訳を依頼されて彼らに同行しました。コンサートでは、「えんどうまめ」代表の石川悦子さんが、これまでキエフで続けてこられた医療支援のいきさつを、また指揮者（女性）のお連れ合いで、元内務省職員の事故処理作業員であるモローズ氏が、チェルノブイリ事故とそのもたらした影響について短く話されました。石川さんたちは、同じ目的で同じ合唱団を2000年と2006年にも招聘しておられ、教会やホールでのコンサートだけでなく、病院や学校（小・中・高）などの訪問も含めると、各回1万人以上の方が合唱団の演奏を聴いたとのことでした。今回も、それに勝るとも劣らない数の聴衆が、ウクライナの民謡や現代の合唱曲、ロシアの歌曲、日本の歌（『涙そうそう』『ピリーブ』など）を聴いたのではないかと思います。私は2006年のツアーでも通訳を務めたのですが、今回は事前に依頼されていくつかのウクライナの歌の歌詞の一部を日本語に訳し、その結果、キエフの人なら皆知っている『私のキエフ』も日本語入りで披露され、それなりに好評でした。ウクライナ文化の日本での紹介に、ささやかな貢献はできたのではないかと、ひそかに（？）喜んでおります。

滞在スケジュールは大変密度が濃く、東大寺大仏殿での奉納演奏というのもあり（雨の降る寒い日で、大仏殿の中でも吐く息が白く、子ども達には気の毒でしたが）、そのほか伊勢神宮・広島原爆資料館・沖縄の摩文仁の丘などを訪問、コンサートでの賛助出演者は琴・尺八・箏・和太鼓・ピアノ・沖縄民謡・エイサー・シャンソンなどの各ジャンルにわたり、これだけ密に日本を体験できたウクライナの人はおそらくごく少数でしょう。ちょうど上関原発の建設問題で緊迫した状態にあった山口県祝島でもコンサートがあり、人口



〈「キエフの少女合唱団」の皆さんと(10.26 大阪)〉

500人だかの島民のうち100人ほどに聴いていただきました。3年前に1人しかいなかった島の小学生は3人に増えていましたが、みな姉弟で、泊めていただいた旅館で合唱団の子ども達と遊びました。沖縄が訪問先に含まれているとあって、全員が水着を用意しており、現地の水温は20℃程度ということでしたが、エメラルド色の遠浅の海に入って大はしゃぎでした。私は、砂浜で眺めていただけでしたが、11月23日のことで、平年より暖かめのキエフでは、プラス7℃くらいの気温だったとのこと。

合唱団は、学校の授業を休む期間を少しでも減らしたいと、1週間の秋休みを含む日程を組んだのですが、彼らがキエフを離れて間もなく、西ウクライナを中心にインフルエンザが急激に流行し始め、新型インフルエンザによる死者も発生したため、キエフ州を含む9州だったかで、すべての教育機関は3週間の休校という措置が取られました。キエフの薬局ではマスクや感冒薬が売り切れ、ビタミンを多く含むレモンなどの果実の価格が急上昇するという状況になったそうですが、その後事態は徐々に沈静化し、パニックは収まっているようです。しかし、新型に限らずインフルエンザの犠牲者が多く出ている原因の一つが、ウクライナの医療事情の不備であることに疑いはありません。

一方、某週刊誌によれば、首相以下すべての閣僚は8月時点ですでにアメリカ製（？）のワクチンによる予防接種を受けていたとの情報があるそうです。大いにあり得べき話と思われます。 (11月27日)

NPO法人 チェルノブイリ救援・中部 2009年度上半期 収支報告書

(2009.4/1～2009.9/30)

収入の部			支出の部		
項 目		金額(円)	項 目		金額(円)
寄付金		2,510,029	事業費		9,308,571
個人	一般	856,080	ウクライナ農地改善事業費	6,279,936	
	ミルク	101,000	医療機関支援事業費	547,173	
	奨学金	9,000	被災者団体等支援事業	550,127	
	維持会員費	240,000	業務委託費	393,788	
	一坪	133,000	駐在員費	405,963	
	賛助会員	106,000	文通・クリスマスカード事業費	11,273	
	菜の花プロジェクト 寄付金	827,784	通信誌発行費用	460,360	
	その他	137,165	イベント関連費	659,951	
	団体	100,000			
民間団体助成金		1,120,010	管理費		1,881,011
ボランティア貯金助成金		3,824,000	給料手当	509,500	
雑収入		93,373	荷造運賃	0	
受取利息		3,861	印刷製本費	0	
/			旅費交通費	83,510	
		会議費	9,200		
		通信費	93,267		
		消耗品費	113,639		
		修繕費	0		
		水道光熱費	10,944		
		支払手数料	43,937		
		為替差損	0		
		諸謝金	0		
		諸会費	41,000		
		新聞図書費	0		
		租税公課	5,500		
		地代家賃	260,619		
		職員研修費	620,010		
		雑費	89,885		
		当期収入合計		7,551,273	当期支出合計
前期繰越収支差額		8,801,470	当期収支差額		▲ 3,638,309
収入総額		16,352,743	次期繰越収支差額		5,163,161
			支出総額		16,352,743

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

平成 21 年 11 月 1 日 監査人 神野 美知江

会計を担当して1年と半年が経ちました。

外部の方からのサポートにより、日常の会計業務が明確かつ、無駄なく行えるようになりました。繰越金が少なくなってきたことが気がかりですが、今後も頑張っていきたいと思ひます。

(山本梨恵)

事務局便り

今年もたくさんの方々のご支援をいただいた。「財政危機」に直面するチェル救にとって、ことさら、ありがたいことだ。例の「ちょっと先行く試み」＝菜の花プロジェクトへの取り組みは、まだまだ、簡単に事は運ばないかもしれないが、「前代未聞の事故」への「未踏の試み」に「やってご覧!!」との熱いエールをいただいていると感じる。…会議が終わった後に行く「打ち上げ」の居酒屋で、そこのご常連が、10月イベント月間に助っ人で活躍。チェル救「フリーマーケットどこでも行く隊」が結成されるとの話も浮上している。

何度もこの欄で書いているが、本当に多くの方々を支えられ、ここまで来た活動だとつくづく感じる。皆様のご支援に心より感謝。 (山盛)

「菜の花 一坪キャンペーン」のお知らせ

3年目の「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」は、秋撒きも終わり、まもなく厳しい冬越えの季節をむかえます。2年目秋撒き・3年目春撒きのナタネも順調に収穫されました。

バイオディーゼル油・バイオガス装置も完成し、いよいよ本格始動です。そこでこの間、呼びかけをしている「菜の花一坪キャンペーン」です。ナロジチ地域・農業の復興を願う日本人の声を、菜の花畑に届けます。来年の春撒きから、菜の花畑に看板を設置して、ナロジチ地区の人々を勇気づけます。

あなたのお名前(県名と苗字)が、ウクライナの人々の希望に満ちた瞳の中にきらきらと映ることでしょう。ひとりでも多くの方が、ひとりでも多くの人を勇気づける為に…。

「菜の花一坪キャンペーン」へのご加入をお願いします。(p3参照)

編集後記

☆ここキエフで、毎日の「徒歩通勤片道35分」が結果を出し、3ヶ月弱で4キロ減。重いブーツも辞書入りリュックも、トレーニングとなればなんのその。そろそろ下げ止めなくては、寒さが身に凍みるか。(今日)

☆「新型ワクチンを打たないと死んじゃうかも…。予防接種をしなきゃ!」という切羽詰まったあなた。手首までの丁寧な手洗いとかテキン喉奥うがいで、自己防衛できますよ。(美)

☆最近、注意力散漫で車の運転中、ひやりとすることが、よくある。注意力散漫で、包丁で指もよく切る…。五体満足のうちで注意力を養わねば、楽しい老後はなさそう。(佳)

☆世界は、アル・ゴアの「不都合な真実」で、催眠術にかけられている。二酸化炭素の増加が地球温暖化をもたらすのではない。温暖化で、二酸化炭素が増加するのだ。太陽の活動が活発になることにより、電磁波が増加し、地球上の雲を吹き飛ばす。雲の少なくなった地球は宇宙線にさらされ暖められる。これが地球温暖化の真相である。なぜ、二酸化炭素犯人説が声高に叫ばれるのか? それは、原子力利権、そして「二酸化炭素排出権」という架空の請求書でひと稼ぎしようという利権によるものである。この利権の最大の餌食は、いうまでもなく日本国民である。「地球温暖化詐欺」でネット検索することをお薦めする。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473